



阿波三峰

朝念暮念

中津峰山如意輪寺

徳島市多家良町中津峰
TEL088-645-0008 FAX645-0508
http://www.mt.ne.jp/~nyoirin
nyoirin@mt.ne.jp

バス便、 1/ 1、 18 2/ 20 9:30ア三前発

親子の鐘の中津峰

問い合わせい合わせ : 徳島市バス観光課 088- 652- 2133

謹賀新年二〇〇〇年 (ミレニアム) を迎えて

私たちは佛教徒だが、千年といふ記念の年に生きていく。前の千年紀は長保一年の平安時代、翌年「祝草子」が発刊された。今年一年生きる二世紀にまたがり、一年先の目標がはっきり見えてくる歳である。当山では「平成の大修理」として仁王門の解体修理をした。昭和五十七年「鐘楼門解体修理」の時、文化財上級認定棟梁矢野栄久氏（山梨県）の門を叩き、その後、文化財棟梁の道を進んで、一昨年矢野と同じ文化財上級認定棟梁の資格を取得した竹内秀雄棟梁（八万町長谷）があたる。重要文化財なみスタッフである。仁王門は未指定文化財だが郷土徳島の誇る建造物である。ゆえに完璧を期したい。

どうか皆様、この二〇〇〇年紀事業の一部分にでもご参画いただくとお願ひ申し上げます。

「第十の堰」の住民投票

徳島市では「第十の堰」の住民投票がある。住民投票は次の問題がある。一、日本国憲法に国民投票（憲法改正時のみ）は、憲法改正時のみ。沖縄、名護市の住民投票結果は法的に位置づけられないことがその後の展開で証明される。私は「国、県庁がいう」「公共工事」に住民投票はなじまない。とは思わない。住民投票の制度をきちんと整備し、それによって決まるのなら最良と思ふ。現に外国で住民投票が規定されているところではやっていることである。しかし、それには憲法を改正し、国の秩序の改革が必要になる。二、例えば私は勝浦川の住民である。行ったこともない第十の堰の是非を語るのはおこがましい。私のように吉野川と関係ない市民が何割かはいるだろう。三、代議制民主主義の第二次大戦後の合衆国で一部の地域で住民投票を行った。なぜ、彼らだけに権利があるのか」と

問題になった事実もある。吉野川は徳島市のみ川ではない。県西部から最東部まで流れる大河だ。その中に第十の堰に關係ある住民はどれだけのいるのか。それを徳島市民だけ行うのは法の下の平等に反するのではない。四、住民投票は公職選挙法と同じ方法でよいのか。公職を選ぶのと、意見を集約するのは意味が違ふ。徳島市の条例はその部分をよく議論されていない。それに対し、今の政治不信の原因は住民の意見が繁栄されないことにある。最良は先述のとおり制度を完備して住民の意志が繁栄されるようすべきだ。そのため第一歩として徳島市民の意志を打ち出すことにあるという意見もある。

長良川河口堰の調査にあつた。ある大学の名誉教授は「日本には河川工学があつても、河川学がない」と。法事の席でのご様子。博士は聞けなかつたが、老博士のいわんとするところは人文科学、自然科学を総合した河川の関する集大成した学問がないことをいわれたのだらう。河川工学といふのはつまるところ対処療法でしかない。今流れている情報はあまりにも河川工学的なものか、情緒的自然科学或いは扇動的政治的なものばかりである。

とはいっても、具体的に第十の堰の可動堰化、是非を投票することにある。しかし、徳島市民は他市町村民の羨望の中での責任は重く、八十三万徳島県民を代表して投票する気概を持つべきか。四千五百万円は五十%を割って無効となることだけさげたいものだ。

武市一夫奉賛会長ご逝去

昭和四十六年、当山奉賛会発会以来奉賛会長をしていただいた。武市一夫先生が昨年十二月十四日、八十歳を一期として都卒浄土衆旅立たれた。先生は昭和十六年、東大の最終学年時当山で高等試験（所謂高文）受験のため三人の学友といっしょに山籠もりで勉強された。

そのとき、我が父は若い学生の刺激を受け、五十歳でがんばって私が生まれたという。私の幼名は三津保、三人の学生にちなんで付けた名前だとか。かくして当山を住職一代にわたり外護いただいた。特に私の代になって、若輩浅学な私の後をいつも見守ってくださいました。

先生の功績については昨年三月号の本誌に叙勳記念として述べさせていただいたが、当山の道路は峰越し林道として林道高規格のものが新設されたときの日本第一号、県道並の高規格舗装も同様日本最初というものであつた。建設当初はたくさん県外から視察が来たものだった。これも先生の先見の明の証と特記しておきたい。

実は先月十五日に先述の「仁王門解体修理」についてのご相談に行こうと思つて前日に先生の訃報である。驚きと落胆の究であつた。十六日の葬儀には五十年を越えるおつきあいの方々がをはじめ、旧知の方々の千人のご会葬があつた。先生のご人徳のしからしむるところであらう。衷心より冥福をお祈りします。

二〇〇〇年庚辰（かのえたつ） 近藤義二

庚には三つの意味があります（一）継承、継続（二）償つ（三）更新です。前年からのものを断絶することなく継続して、いろいろの罪、汚れを払い浄めて償う。とともに思い切って更新して行かねばならぬということですから、革命（Revolution）に持つていかず、進化（Evolution）へ持つていく、

一冊の本 『砂漠の女デイリー』 草思社

ワリス・デイリー 武者圭子訳

ソマリアといえば、よく思われる人が何人いるだろうか。アフリカのインド洋に面した半島、砂漠地帯である。そこに住む遊牧民の少女が十四歳で父親に結婚を強いられ、砂漠を逃亡。母親の親戚がイギリス大使をして、縁でイギリスでメイド。その後、大使家族から逃げるようにしてイギリスに残りモデルに、その後アメリカに渡った彼女はとうとうスーパーモデルとなった。しかし、この本は成功物語ではない。

家内のところに時々FGMなる団体から手紙が届く。封筒の外側に女性性器切除とある。私はこの本に出会うまで、何のことなのかわからなかった。旧約聖書に割礼という言葉がある。私たちが日本人にない風習だ。それ

ネパール紀行・ネパール十年の発展（続ブータン紀行）

今回をもって本紀行を閉じたい。カトマンズの喧噪を離れ、十五kmほど離れたバドガオン（バクタブル）へ向かう。ネパールの田園風景を楽しんでいると車が止まった。ここからヒマラヤを見ろという。限りなく続く畑、青い空のあなたに浮かび上がるように真白き神々の峰ヒマラヤの連山。カトマンズ市内の喧噪とは違ってかわつた田園風景である。サンスクリット語でヒマは雪、アラヤはたくわえるもの、雪の倉の意である。バスの中から出した全自動のカメラが動かない。しばらく構えていると、薄暗いバスの中からいきなり高い照度の戸外にでたものだからカメラがびくびくしたらしい。十年前の機材はこういふこともある。バクタブルではチップポイントで入場料（ここでは文化財保護基金）を払い、のんびりことを散策する。カトマンズから十五kmほどでかくも雰囲気違うものか。十五世紀から十八世紀にかけてのマッラ王朝時代に三王国の首都の一つとして、最盛期をむかえたネパール文化で大発展をした「帰依の町」という意の町である。のんびりはいいいだが建造物はだいたい老朽化している。文化財をあずかる一人として保存がたいへんだらうと思う。

人の少女がついてきた。インドの物売り少年のように「これやすいよ」と何人もがついてくることはない。我々を遠巻きにして時々、唯一の商品野球帽をみせる。おみやげにちよつとよい時間をかけじっくり値切る。十年前より品物はカラフルで良質である。また、古い建物を利用して土産物屋もある。その店を覗くと大学の日本語学科の学生がアルバイトをしているという。値切りにかかるあまり経験がないが、日本語のみ一生懸命。好感がもてるのでカシミアのショールを買った。中央広場の五階建ての望楼に喫茶店がある。休憩をしてしていると先の少女たちが盛んに帽子をすすめる。上と下で手真似のやりとりする。この手の買い物はバスの中で最後の取引をするにかぎる。初めてのインド、鷲峰山の頂上で数珠を買った。それで取引は終わり。山頂から重い荷物を自分で運ばねばならない。この場合頂上から二十分の道を値切りながら下るべきだった。荷物は先方の物だから当然持つて降りる。かくして、バスの直前で「野球帽を買った。その子が、私の親友が商いがないのでネパール帽を買ってほしいか」と泣き顔でいう。友情なのか手口なのか分からない。彼女たちのおかげで楽しく過ごせた。お礼と思い買つてやるとうれしそうに二人仲良く見送ってくれる。やはり一人だけの商いでは友にせ

つなかつたのだらう。聖なる川ガンジス川の支流にある。ネパール最大のヒンズー寺院であるとともにインド亜大陸の四大シバ寺院の一つである。だが、ヒンズー教徒以外は入れない。この地はいやでも河畔にある火葬場を見学する。ここでも佛教とヒンズー教が仲良く並んでいる。この日はお日柄が良いのか葬儀のラッシュである。佛教の葬儀場（カート）では茶毘が完了するまで僧侶が鉦、鉢を鳴らせてお経をあげている。一方、ヒンディのガートは日本の講中のようなものか親戚が不明だが、静かに材木を組んでその上に白布で包んだ遺骸を祀って火をつけている。だが、ベナレスの火葬場のような喧噪はない。我々も静かに通過して奥へ進む。十年前に来たとき、崖壁に切り取つて穴をあけた礼拝所があり、そこを撮影していたら修行者がいて驚いた。今回そこは大きくなって生活の場になつている。反対側を上階段を上がると気味の悪い修行者が写真を取ると手をはたつてくる。ずっと以前に紹介した本「迷」の主人公の画家がこここの灯籠でしばらく生活する様子があった。最低限で生活できらうしい。この付近はアンモナイトの化石が多い。陽気なカトマンズ観光にあつてここだけは暗い。神聖な人の最終儀式を観光気分で見ると贖罪感からだらう。

私たちはここを最後にカトマンズ中心街のネパール料理レストランで夕食。ネパール独特の、野菜、ご飯、肉にスパイスのきいたソースをかける料理。ここでは酒、チャ（ン・焼酎）の燗をしたものに火をつけ小さい杯に「メートル」ぐらいのところで注いでくれる。昔、斎藤道三が油売りの頃一文銭の穴に油を通したような技である。満腹になつたところで六回目のおなれた道を空港へいよいよ彼の地をお別れした。 一完